

「団塊の世代」のひとりごと

東京医療センター
 榛葉 哲男

この3月で38年間の公務員生活を終えることになります。平成17年から4年間この「医療」の編集委員を務めさせていただきました。60年を超える歴史のある「医療」の査読を経験できたことは大変勉強になりました。また第三者の書いた文章の誤字、脱字をみるだけならば簡単ですが、論文の内容まで踏み込んで適格かどうかを判断するのは非常に難しく大変でした。この査読を本来の医療業務と並行しながら10年以上も編集委員を続けている先生方ならびにすべての文章に目を通さなければならない編集委員長に敬意を表します。

「団塊の世代」の退職が2008年から始まりました。この「団塊の世代」は正式には昭和22年-24年生まれの第一次ベビーブームを言い、名付け親は堺屋太一さんだそうですが、生まれた数は800万人を超えており、25-26年生まれを含めると日本の人口の約10%がこの5年間で退職することになります。オギャーと生まれた時からすべて競争、数、数、で世の中を動かし、学生時代はビートルズ、グループサウンズに熱中し、コークハイを飲み交わしながら議論をし、血気盛んに学生運動に走り、またすぐ日和った者も多かったと思います。また当時の会話の中で盛んに使われた「オルグ」「セクト」「ノンセクト」「内ゲバ」「ナンセンス」などは今では死語になっていますが、ただ最近の若者の「マジ」「超……」「めっちゃ……」「お疲れ」などの言葉に較べたらまだ

少しはましなのかなとも思います。

今30歳前半から20歳後半にかけての我らの子どもたち「団塊ジュニア」に昔の青春時代の話をして、お伽噺とぎばなしにしか思わず、関心も示してくれません。とかく「今の若い者は」とはなるべく言わないようにしているのですが、顔には出てしまいます。われわれの若かったころも親から見れば、戦争を知らない連中が何を言うかと同じように思っていたことでしょう。

時代は繰り返すと申しませんが「団塊ジュニア」が還暦を迎えるころに自分たちの子どもたちに対して何というか、それまで生きていれば聞いてみたいものです。

さて、「団塊の世代」も今は元気でいても10年後にはほとんどの人が何かしら病気を持って医療機関のお世話になりますが、決してクレマーにならず反面教師とし、よい患者さんでいたいと願っていますが、ひと言多い世代のため難しいのかなとも思いますが、最近どこの医療機関でも困っている「モンスターペイシエント」とは違って、言うことは言って権利は主張しますが、義務もきちんと果たし、納得すれば全面的に協力するという素直さを持っていることは自負できます。

高校時代に日本国中が熱狂した東京オリンピックが半世紀ぶりに再びやって来るのをひたすら願って第二の人生を歩み始めます。大変お世話になりました。